

北陸新幹線 深山トンネル掘削工事で影響が出ている後谷への影響と フォローアップ委員会での保全策検討のお願い

中池見湿地は湿地本体部分と「後谷」部分が一体となって「袋状埋積谷」という特異な地形を形成している。後谷は湿地本体からの唯一の水の出口として、また豊富な深山からの湧水により多様な水環境を包摂しており、湿地本体とは違った生物多様性を有する場所である。

今回の北陸新幹線トンネル建設に伴う工事で、湿地本体への影響は見られていないものの、地下水位の低下が事前に予測されていた深山については、No.3 上流の谷や No.5 の谷からの湧水が激減し、後谷の田んぼや周辺の湿地に十分な供給ができなくなった。また、後谷は中池見湿地の玄関口となっているが、高架橋や枯れた沢、干上がった湿地などが来園者にも見える形となり、生物多様性と生態系サービスに大きな影響を及ぼしている。具体的には以下のような影響がみられている。

【沢】

- 鳥類や哺乳類が利用できる沢の水場が減少した。
- 積雪時でも餌場・水場として利用できる水辺が減少した。
- 深山から流れる沢が、中池見湿地において特徴的な「源流部のトンボ類」の限られた生息地となっており、源流部のトンボ類の代表種であるアサヒナカワトンボ、ミルンヤンマ、ヒメクロサナエは、新幹線工事で深山の沢の水が減少したことにより、2022年には確認できなくなった。
- 溪流の岩のすき間や、地下をゆるく流れる伏流水中に産卵するタゴガエルは、工事前には沢全域から繁殖時に声が聞こえていたが、2021年以降声が聞こえる範囲が狭くなった。

【湿地】

- 2020年からNo.3上流の谷の湧水が減り、その水を利用した田んぼや周辺の湿地にひび割れが生じ湛水できない状況となった。
- 後谷が主な生息地となっているゲンジボタルは、No.3上流の谷の湧水が流れこむ調査区で最も多く見られたが、2019年には最大個体数200匹近くだったものが2020年に最大個体数が1/3以下に激減し、その後も減少して2022年には2019年の7.8%にあたる15匹にまで減少した。
- ニホンアカガエルとヤマアカガエルの卵塊数は「後谷」地区で、2020年から2021年にかけて卵塊数が約1/3に減少し、2022年もさらに約1/3に減少して2020年の卵塊数の11%にあたる35個まで減少した。

- ▶ 2015 年から後谷に生息するモートンイトトンボは、湧水減少による後谷の田んぼの湧水により 2022 年には確認できなくなった。
- ▶ ザリガニが侵入していない後谷の田んぼに生息していたクロゲンゴロウは、湧水減少による後谷の田んぼの湧水により 2020 年から確認できなくなった。
- ▶ アカハライモリは後谷の田んぼにおいて 2019 年まで全面的に確認できたが、湧水減少により 2020 年には残った水場に限定的に見られ、2021 年からは水場もなくなり、確認できなくなった。
- ▶ 湧水減少による後谷の田んぼの湧水によりモリアオガエルやトノサマガエル、アマガエルなどの両生類の産卵場所がなくなり、幼体も生育できない状況が観察された。
- ▶ 咸新小学校の学校田や保全活動ができなくなった。

【マンガン廃坑】

- ▶ 深山の北側斜面のマンガン廃坑群の中でも東側に位置する廃坑（通称ミジンツボ廃坑）は、坑内に常時伏流水が流れ込み水生生物が数多く生息する多様性が高い場所であった。しかし 2020 年以降水の供給が不安定になり、完全に水がなくなる状況が何度も見られるようになり、2022 年現在メクラヨコエビ sp.、メクラミズムシモドキ、イワトビケラ科 sp.などの一部の生物が見られなくなった。

トンネルの防水処理も終わっているが、現状では後谷に流れ込む湧水すべてで水量の回復は見られておらず、トンネル完成から 1 年が経過した今も大きな影響がでている。ラムサール条約決議 VII.24 「失われた湿地生息地等の機能の補償」の中で、「10. 締約国に対し、人間活動に起因する、湿地の機能、属性、価値の喪失、湿地の質と表面積との両方の喪失を補うためのすべての実行可能な手段を講ずるよう要請する。」とある。失われた後谷の湿地とその機能の回復のための実行可能な手段についてフォローアップ委員会にてご検討いただきたい。

実行可能な手段の検討にあたっては、後谷の中で分断された湿地をつなげ、効果的に水をまわすことで多様な水環境を回復する選択もあると市民側では考えている。後谷は 1997 年頃まで棚田として維持されてきたが、1998 年～2000 年にふれあいの里等の一連の構造物建設のために現在の田んぼの上流部分が土砂捨て場として埋め立てられ分断されている状況にある（別紙）。保全策の具体化にあたっては、市民側も協力していきたい。

以上

NPO 法人中池見ねっと
NPO 法人ウェットランド中池見
公財財団法人 日本自然保護協会

■ うしろ谷の環境変遷と現況(2019)



モニタリングサイト 1000 調査のホタルについては、ここ「うしろ谷」を調査地点に 2006 年から始めました。当時は開発計画のアセスメント調査が終わり、環境影響評価書が提出された頃でしたが、ここへの致命的な影響は及んでいず、ホタルの季節には谷いっぱいに乱舞する見事さに歓声をあげたものでした。中池見口、後谷地籍では稲作が行われており、美しい田んぼの風景と舞い飛ぶトンボの姿が印象的な所でした。しかし、ガス基地建設に先立って着工した環境保全エリア(中池見人と自然のふれあいの里)の造成で削り取られた土砂捨て場となり、姿を消しました。



勝屋谷口(1)
6 筆 1674m

雑地+イチヨウ、杉等

トラスト 1 号地

ミストラノオ



竹(女竹林)

湿地(池)

低茎草類(スゲ類)

作業員休憩小屋



排土投棄埋立地=ふれあいの里造成時分
半分=ススキ 半分=駐車場 周辺部=竹林

1993 年頃の「後谷」の様子
中池見への細長い谷の中ほどでホタルの乱舞が見られたポイント



後谷
6 筆 4915m²

田んぼ

お地藏さん

田んぼ状(コナギ他水田雑草類)



ヨシ+ミゾソバ

一番いい場所がふれあいの里造成のための排出土捨て場になり、埋め立てられて現在はススキ・ササなどが生い茂る荒廃地の様相。(上写真と同じアングルの現在/左写真は埋立時の様子)

美しい棚田風景が中池見への楽しいアプローチだった頃(1993 年頃)



中池見口
2 筆 3163m²

低茎草類(スゲ類、ミストラノオ)

ヨシ、ガマ+ミゾソバ

中池見・樫曲
駐車場(仮設)

□内は 2019 年の現況